

堅田は、比良山系東麓、南北に広がる琵琶湖の湖面が最も狭まった北湖と南湖の境界付近の西岸に位置しています。

この町は、近江八景の一つに数えられる「堅田落雁」や水面に浮かぶ「浮御堂（満月寺）」など風光明媚の地として知られ、浮御堂は滋賀県の代表的な観光スポットとなっています。

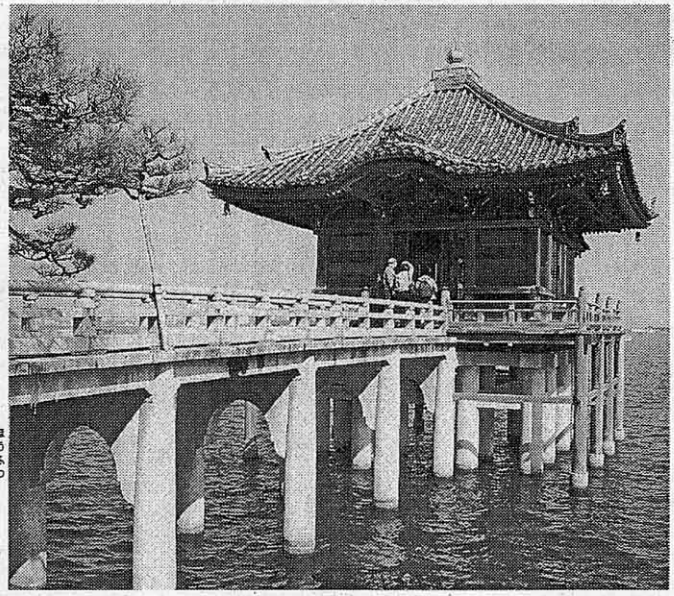
堅田の歴史については、第16・17回の浮御堂の発掘調査において触れましたが、今回は町並みから眺めてみます。堅田の名は、京都・下鴨社に鯉や鮒などの魚を納める堅田御厨として平安時代後期の文書に登場します。そしてこのころ、御厨住人の特権として琵琶湖の自由通行権を獲得します。堅田は背後に天然の港である内湖を持ち、漁師の村としてスタートします。平安時代後期になって、自由通行権を使って急速に勢力を伸ばさせます。同時に、堅田は

琵琶湖が最も狭まった場所に位置することから、琵琶湖を南北に往来する舟は必ず堅田の前を通らなければならぬことが堅田にとって有利に働きました。

具体的には、上乗権と呼ばれる特権です。これは湖上通行に対する承認権を堅田が所持していたことであり、湖上を往来する舟の通行の安全を保障することで警護料を徴収するなど経済的な見返りを得ることができました。さらに、堅田には湖上関と呼ばれる関所も設置され、堅田が関銭の徴収を行っていました。

中世になりますと、さらに自由通行権によって琵琶湖一円の漁業権を獲得し、上乗権や湖上関などの湖上特権を駆使することによって高い経済力とともに武力をも保有します。そして、刀禰家、居初家、小月家の三家（殿原衆）を中心とする堅田衆によって、自治都市が形成されま

水運の町堅田



堅田を象徴する浮御堂

引き込んだ堀が基盤の目状に張り巡らされています。水路に沿って町を歩けば、堅田大宮とも呼称される伊豆神社、アニメ番組でよく知られる一休さん（一休宗純）が琵琶湖入水後に入門した祥瑞寺、「本福寺跡書」や「本福寺門徒記」など真宗史研究に不可欠な記録が蔵されている本福寺、名勝居初氏庭園などを見学することができます。なかでも祥瑞寺では、門や屋根瓦の一部に中世に作られた瓦を見ることができ、境内には一休和尚修養地の碑が建立されています。

の拠点のひとつとして当初は朝倉氏に味方していたものの、織田氏方にくみし、豊臣氏の時代になっても湖上特権が認められていました。江戸時代には「諸浦の親郷」を自称しますが、これまでの特権は次第に制限を受けるようになります。その影響力も薄れていきます。現在の堅田には、中世に形成された自治都市の町

並みを彷彿させる遺構や旧跡が町のあちこちに残っています。湖中には、浮御堂のほか、堅田漁港や灯台が、そして湖岸に整備された遊歩道を歩くと、町の防波や舟の接岸のために構築された優美な石垣をみることができます。この石垣は、屋敷地の境などで途切れていますが、湖辺から町中に向かっては、湖水を

（財団法人滋賀県文化財保護協会 藤崎高志）

湖上特権握り自治都市形成